

# 日本語文法論 (二) 助詞論

北原美紗子

近代詩の詩人の詩を使って、日本語の助詞を論ずる試みを、ここ十年ほど続けてきた。日本語の構造を明らかにしたいと同時に、美しい詩人の言葉に、詩に深くつき合える喜びを味わう事が出来るのは、私にとって魅力ある作業となっている。前回の紀要の為の論文から、また、一年が巡ってそんな日が巡ってきた。

## 秋のピエロ

泣笑ひしてわがピエロ

秋ぢや！ 秋ぢや！ と歌ふなり。

○の形の口オのカタチをして

秋ぢや！ 秋ぢや！ と歌ふなり。

月のやうなる白粉おしろいの  
顔が涙を流すなり。

身すぎ世すぎの是非ぜひもなく  
おどけたれどもわがピエロ

秋はしみじみ身に滲しみて  
真実しんじつなみだを流すなり。

堀口大學の詩である。

泣笑ひしてわがピエロ

おどけたれどもわがピエロ

と、詩人が歌う時、ピエロと詩人が合体する。

秋ぢや！ 秋ぢや！ と歌ふなり。

秋ぢや！ 秋ぢや！ と歌ふなり。

顔が涙を流すなり。

眞実なみだを流すなり。

断定の助動詞「なり」が、一連ずつを締めくくる。その中で、一連だけ違う。

身すぎ世すぎの是非もなく

おどけたれどもわがピエロ、

この二行は、他の断定していく強さの中で、どこか、不安定でおぼつかない。是非もなく、おどけたれども、二行ともに、係助詞の「も」が使われた。不確定の陳述に係つてゆく、相呼応していく係助詞の「も」が登場すると、その周辺は、不安定にゆれ出す。その連を受けて、

秋はしみじみ身に滲みて

眞実なみだを流すなり。

他を排除して、断言する強さを持つ係助詞「は」と呼応して断定の助動詞「なり」で言い切る、この最後の二行は、読み手の心に、重く深くつき刺さる。

# 『遠き薔薇』序

云ふ可くは遠き薔薇か

はたはまた近きまぼろし

み空なる星のたぐひか

闇にある時にほの見え

明るみに出づれば消えつ

わが歌は声ひくくとも

わが歌は呼吸ちさけれど

在りはありさだかならねど

ありありと目には見えねど

風ふけば匂ひはゆれつ

この詩には、係助詞の「は」が、連続して出てくる。

云ふ可くは遠き薔薇か

はたはまた近きまぼろし

み空なる星のたぐひか

わが歌は声ひくくとも

在りはありさだかならねど

ありありと目には見えねど

風ふけば匂ひはゆれつ

係助詞「は」は、確言し切る強さを持つ。ただし、確述の陳述にかかつ

て終るからと言って、表現された内容が強気なわけではない。

在りは在りさだかならねど

ありありと目には見えねど

織細さは、強い断言の中から、逆に、浮かびあがってくるとも言える。  
しかし、係助詞「は」の排除の力は、この詩でも充分に生きている。

わが歌は声ひくくとも

わが歌は呼吸ちさけれど

係助詞「は」が出てくるたびに、明快な表現で完結していく。そして、  
最後、

風ふけば匂ひはゆれつ

織細でありながら

匂ひはゆれつ

と、完了の助動詞「つ」で断言した。

## 要

海が扇子をひろげる

ああ 私は要だ

遠い白帆はさびしい

私に似て

ありありと一人ぼっちだ

係助詞「は」は、一人ぼっちの世界を表現するのに、ふさわしい  
助詞だと言える。

## 死者に告ぐ

死者たちよ、

忘れられたと君等は言ふか、

見棄てられたと君等は嘆くか？

思ひ出さぬか、地下の住者よ、

言っていること、してわること、

掟の多い地上には、

どんなに貧しい君等の一人も、

与へられてる一隅の地を、

お墓の石を、夢想の自由を、

それさへ持たぬ生者が満つると？

彼等の額の深い皺は、

世界のゴムをすべて集めた、

消しゴムさへも消し去り得ないと。

彼等の悩みはあまりに深く、  
彼等の生はあまりにつらく、  
為めに彼等は怖れもせずに、  
地下の眠りを待ちさへすると、  
地下の住者よ、死者たちよ。

この詩は、堀口大學の第五詩集『人間の歌』に収められている。この詩集について、解説者の平田文也氏は述べる。

第五詩集。昭和二十二年五月五日、宝文館刊。七章七十三篇を収録、うち「乳房」章は詩集『ヴェニウス生誕』の一部を再録したもの。詩人はこの集の「あとがき」で読者によびかける。「ひとりの人間が二十年間、一生の夏から秋の季節を生きて来た、その心のてりかげりの歌として、読んでいただきたい。」と。二十年の沈黙を破って出されたこの詩集の一篇一篇は、大學詩の花というよりは果実とみるべきだろう。花として手にすれば硬質の重さを感じ、口にすれば豊潤な詩情がみなぎるからである。

また、解説の中でも記す。

在来（ざいらい）の日本詩にはついぞ感じられなかった大學詩の、あの爽快な肌合いの秘密のひとつは、新しい西欧風のこの発想法にあったのだ。すべて芽ばえや開花は、喝采（かつさい）と野次のなかでいつそうきわだち、期

待と不安と恍惚とをまじえてさまざまの変化をみせる。しかしそれに反して結実（けつじつ）は、ひそやかで決して目をみはる進展の過程は示さない。それはあくまで孤独のいとなみであり、すべてのエネルギーはくらい内部へとむかい、ただたゆまぬ忍耐とふかい沈黙があるばかりである。そうした堀口大學における詩の結実（けつじつ）は、昭和十五、六年、あたかも嵐をはらんだ暗雲（あんうん）が日本の内外にたれこめるころ、その端（はた）がひらかれたように思われる。もともと詩の結実（けつじつ）は詩人の内的必然によるいとなみであるが、かれの場合、それとあいまって時の四辺の勢情（せいじやう）が、結実の過程へとかりたてたようだ。戦時統制下、情報局や出版会の、自由を愛するこの詩人への弾圧（だんあつ）はいっそうきびしく、かれの著書は再度、出版拒否（しゅつぱんきよひ）の不幸にもあう。

近代詩の名だたる詩人の生涯は、詩の栄光と名声とは裏腹に、不幸な場合の方が多い。美しい数行の言葉が、どんな状況の中で生み出されたものなのか。興味のある事である。

外交官の父に連れられて、当時、普通の人にとっては、手の届かない程、遠いメキシコ、そしてヨーロッパで暮した堀口大學の、西欧風の発想から生まれた作品は、それ故に、大正ロマンのつかの間の自由を経て、日本の暗い時代に入っていく中で、封じ込まれていた。それは二十年間の長きにわたったという。「死者に告ぐ」の厳しさも、そして、私の好きな次の詩も、詩人の苦悩の沈黙から生れたものだった。

魂よ

魂よ、

お前は扇<sup>あふぎ</sup>なのだから、

そして夏はもう過ぎたのだから、

片隅のお前の席へ戻っておいで、

邪魔<sup>じゃま</sup>になつてはいけないのだから。

魂よ、

お前は扇なのだから、

そして夏はもう過ぎたのだから、

もう一度自分に用があらうなぞと

思つてはいけないのだから、

たとへ夏はまた戻つて来ても

来年には

来年の流行<sup>はやり</sup>があるのだから。

魂よ、

お前は扇なのだから

お前は羽搏<sup>はばた</sup>きはするが

翔<sup>と</sup>ぶことは出来ないのだから、

似てはゐても

お前は翼<sup>つばさ</sup>ではないのだから。

いま時<sup>とき</sup>は、秋なのだから

そして冬も近いのだから、

邪魔になつてはいけないのだから

お前は小さくなつて

片隅のお前の位置<sup>ありか</sup>で

松吹く風の声と

岸打つ波のひびきに

わななきながら

聴きいつてゐるがよいのだ

魂よ、

お前は、

お前は、

扇なのだから。

(戦ひの日、興津にて)

詩人は詩人の魂に呼びかける。声を低めて。この詩の中で、主要な助詞は、係助詞の「は」であつた。そして、接続助詞「だから」であつた。

魂よ、

お前は、

お前は、

扇なのだから。

係助詞の「は」「も」、格助詞の「が」「を」の四つの助詞の中で、もっとも自由な表現が許されるのは、係助詞の「は」である。強烈な意志表示が出来るのも、確固とした信念を述べる事が出来るのも、助詞の「は」である。そして、その助詞を多用して

魂よ、

お前は扇あふぎなのだから

そして夏はもう過ぎたのだから

邪魔じゃまになつてはいけないのだから

魂よ、

お前は扇なのだから

そして夏はもう過ぎたのだから

もう一度自分に用があらうなどと

思つてはいけないのだから

たとへ夏はまた戻つて来ても

来年には

来年の流行はやりがあるのだから

魂よ

お前は扇なのだから

お前は羽搏はばたきはするが

翔とぶことは出来ないのだから

似てはゐても

お前は翼つばさではないのだから

いま時ときは、秋なのだから

邪魔じゃまになつてはいけないのだから

お前は小さくなつて

魂よ

お前は

お前は

扇なのだから

四連、三二行の詩を、詩人は書いた。係助詞「は」の陳述に係る力の及ばない行は、次のわずか一行だけである。

そして冬も近いのだから

係助詞「は」の確定の陳述との呼応に相對して、不確定の陳述を引き寄せる、係助詞「も」の使われた一行だけであつた。

堀口大學は、自由人であつた。詩人の魂は自由を求め、絶望し、苦しんでいたに違いない。それだからこそ、「魂よ」という詩で、詩人は、

自らの魂に呼びかけた。全篇、係助詞の「は」で呼びかけ続けた。原因、理由を断言する終助詞「だから」を繰り返し、繰り返し使った。接続助詞の「だから」を、この時代に、既に終助詞と言う事が許されるのかどうか。

詩人の、優れた言葉の感覚が、先取りしていたのかも知れない。

私は、係助詞「は」の機能の本質は、その意味機能の本質は、判断の陳述にかかわる事であると思っている。そう考えると、時枝誠記の言語過程説で、何故、助動詞、感動詞とともに、助詞が辞であるのか、分ってくる。時枝誠記の言う辞とは、表現主体そのものがあらわれるものを言う。

著明な詩人でありながら、国家は、詩人の言葉を奪った。奪われた詩人は、沈黙し、そして詩を残した。「死者に告ぐ」も、係助詞「は」が主要な助詞となっている。

死者たちよ、

忘れられたと君等<sup>きみら</sup>は言ふか、

見棄てられたと君等は嘆くか？

「魂よ」の詩で、魂よと呼びかけて、お前は扇<sup>あふぎ</sup>なのだからと、扇であると判断を下した詩人は、「死者に告ぐ」では、死者たちよと呼びかけて、忘れられたと君等は言ふか、見棄てられたと君等は嘆くか？と問いつ

める。詩人の激しい語調は、息づかいは、係助詞の「は」に込められて、言ふか、嘆くかと問いつめる。時枝誠記の言う辞に、表現主体がそのまま、表われるという事は、係助詞「は」に込められた詩人の気魄をも指すのであろう。

日本語の係助詞が、陳述に係ってゆくという、陳述と相呼応したもののなのだという、日本語という言語の特質を、忘れてはならないと、私は、思う。

長い年月をかけての助詞の研究で、日本語の助詞は、道しるべなのではないかとよく、思った。表現主体、話手も、そして、聞手もいかなる助詞が使われたのか、聞いたのかでその後の叙述の、陳述の流れが、瞬時に予測し合っているのではないかと思う。日本語という、ひとつの言語体系の中で、生れ、育てば、瞬時に事もなげに、誰でもが反応する。助詞を辞と定めた時枝誠記は、そこまで洞察し得ていたのか。あるいは、言語学の頃点に立つ、ソシユールのラングの洞察こそが、日本語の助詞の、ひとつひとつの普遍性を、語り得るのだろうか。助詞の道しるべ性というか、助詞の叙述、陳述への方向性を指示する特性を、説明しようとする時に、もっとも説明しやすい助詞と言え、格助詞の「を」である。

われは愛づ

われは愛づ、

若くして老いたる心を、

冬のおそれにわななきつつ

咲き出でたる最期の花を、

涙とともにある微笑を、

明日の日果てなん恋を。

われは愛づ、

失はれたる宝玉を、

生るるに先立ちて

死に行きし接吻を、

あかつきの星の光を、

見果てぬ夢の姿を。

われは愛づ、

散らんとする束の間の薔薇を、

捉へがたなき姿の詩を、

うつろひ易き人の心を、

消入る如きけはひの

青ざめし夕の時を。

係助詞の「は」が三回使われるだけで、行の最後に並ぶのは、格助詞の「を」である。

この詩は、堀口大學の第一詩集『月光とピエロ』に収められている。大學二十七歳の時の詩集である。この詩について、編者の平田文也氏は言う。

詩人は若き日をかえりみて、「二十代、僕は非常な病身だった。三十までの命はないものと、人も自分も信じてゐた。そのためだと思ふ、二十代、僕はしきりに先を急いだ。」と語る。この病弱は、初期の大學詩の、むしろ重要な一要素ともなっている。それだからこそ詩人が、「若くして老いたる心」とうたうとき、そこには精神のダンディズムよりは、人世のふかい絶望がつよくにじむ。そしてまた「うつろひ易き人の心」を愛でねばならなかった詩人の心の底には、やりきれぬ人世の倦怠がよどんでいるのである。

この詩集を出版する二年前、父の任地のスペインのマドリードから単身帰国し、外交官試験の受験準備に専念、第一次には合格したものの、病氣再発、ついに外交官への道を断つと平田氏の年表にあった。その翌年、訳詩集『昨日の花』を自費出版し、好評をくし新刊のフランス詩集を、次々と入手しては訳し、ブラジルから日本に送って、発表したと言う。そして、その翌年、『月光とピエロ』を出版した。

外交官が一人生まれるよりも、堀口大學という、日本人離れたス



ケールの、近代詩人が生まれた方が、良かったのではと、私は思うのであるが、夢破れて大學に残っていたのが、詩人の道だったのかも知れない。そう考えると、最初にあげた詩は、さらに胸にしみる。

#### 秋のピエロ

泣笑ひしてわがピエロ

秋ぢや！ 秋ぢや！ と歌ふなり

Oの形の口をして

秋ぢや！ 秋ぢや！ と歌ふなり。

月のやうなる白粉おしろいの

顔が涙を流すなり。

身すぎ世すぎの是非ぜひもなく

おどけたれどもわがピエロ、

秋はしみじみ身に滲しみみて

真実しんじつなみだを流すなり

ふたたび、「われは愛づ」に戻る。二十代の若々しい詩である。私は、この詩から、平田氏とは少し違う感じ方をする。

われは愛づ、

若くして老いたる心を、

冬の怖おそれにわななきつつ

咲き出でたる最期いまの花を、

涙とともにある微笑びせうを、

明日あすの日果はてなん恋を。

われは愛づ、

若くして老いたる心を、

と歌う時、人生に深く絶望した詩人を私は、見ない。絶望するには、詩人はあまりに若かった。

われは愛づ

われは愛する。われは讃美する。と、断言し言い切っている。もしも、平田氏の言う通り、絶望し、人生に倦怠を覚えていたならば、次々と訳詩を発表し、『月光とピエロ』『パンの笛』と第一詩集、第一歌集を自費出版しただろうか。詩人は、自ら語っているように、二十代、僕はしきりに先を急いだ。死を前に、急いだ。若く、たとえ病弱でも、

若い病弱には、みなぎる力がある。力を持って急いだ。この詩人の力が

われは愛づ

と宣言する詩を作らせた、私には、思える。何を、詩人は「愛づ」のか。

若くして老いたる心を

冬の怖にわななきつつ

咲き出でたる最期の花を

涙とともにある微笑を

明日の日果てなん恋を

失はれたる宝玉を

生るるに先立ちて

死に行きし接吻を

あかつきの星の光を

見果てぬ夢の姿を

散らんとする束の間の薔薇を

捉へがたなき姿の詩を

うつろひ易き人の心を

消入る如きはひの

青ざめし夕の時を

ここに並んだ言葉は、堀口大學という、すぐれた詩人の感性が、何を求めていたのかが、よく分る。そして、すべてを、格助詞の「を」が受けた。すべてを、個別に受け取って、格助詞の「を」は、どうしたのか。

われは愛づ

詩人の宣言に返した。

縫ひつける

星と海盤車を縫ひつける、

海と母とを縫ひつける、

風と鷗を縫ひつける、

敵と祖先を縫ひつける、

花と少女を縫ひつける、

月と銅を縫ひつける、

空と煙を縫ひつける、

羊歯と垂氷を縫ひつける、

雲と眼を縫ひつける、

下手な私の針仕事、

へまな詩人の針仕事。

普通、格助詞の「を」は、目的格を表すと言う。動詞の目的語につくと言う。けれども、英語の文法と同じと、必ずしも考えなくてもいいのではないか。私の、日本語の助詞論から言えば、

格助詞の「を」は、動詞を呼ぶ

につきる。格助詞の「を」がくれば、続くのは、行動を示す動詞である。動作を表す動詞である。

星と海盤車ひとでを縫ひつける

海と母とを縫ひつける

星と海盤車ひとで、海と母、格助詞の「を」が受けると、行動を示す動詞が吸いつく。

縫ひつける

## 海の風景

空の石盤せきばんに

鷗かもめがABCを書く

海は灰色の牧場です

白波は綿羊めんやうの群むれであらう

船が散歩する

煙草たばこを吸ひながら

船が散歩する

口笛を吹きながら

## カラヴァン

カラヴァンは果なき鬱憂うついうをのせて、  
果なき砂原を南へ下る

行き往けど、行き往けど、地平は遠く。

行き往けど、行き往けど、昨日も、今日も、

太陽は出でて、太陽は沈み、

星いでて、星は消え、

忘却の風すぎて、来し方に足跡たえて、

思ひ出はただにかの灰色の空と砂のみ、

ゆく末の望のぞみをかくる地はあれど、

命いのちのはてか、遂にわが奥津城おくつぎどころ……。

魂は果なき鬱憂をのせて、  
果なき砂原の時却を下る。

## 蛇

地を這ひ、円柱を巻き、太陽の前に鱗干すもの、  
汝、生ける曲線、  
花絡の如く、ながながと樹間に懸り、  
稲妻に似て青葉のかげを過る、  
美しきつかのまの邪の神、蛇よ、  
汝に礼す。

鷗がABCを書く  
煙草を吸ひながら  
口笛を吹きながら  
鬱憂をのせて  
砂原を南へ下る  
望をかくる  
鬱憂をのせて  
時却を下る  
地を這ひ

## 円柱を巻き

### かげを過る

格助詞の「を」がくると、とにかく動く。軽やかに動き、すべり出す。

私は、卒業論文に係助詞の「も」をテーマに選び、結論がきれいに  
出て、大野晋先生の弟子にして頂けた。けれども、修士論文では、「も」  
の研究の継続をやめて、格助詞「を」をテーマに選んだ。修士論文提  
出直前まで、下宿の部屋いっぱい、カードを並べて、あせっていた  
日の事を、なつかしく思い出す。当然、卒論の時のような評価は得ら  
れなかった。口述試験の時に、大野先生は言われた。

柳の下に、どじょうは二匹はいないよ。

その、混乱した修論の中で、たったひとつ、忘れられない特質があつ  
た。それは、格助詞に、もっとも深く、つながっていくのが、動詞の  
連用形なのだということだった。

係助詞の「も」は、未然形ともっとも、深く係わり、係助詞の「は」  
は、終止形ともっとも深く、係わるといふ結論を、卒論で論じていた  
ので、なおのこと、私の思考は混乱し、動揺した。陳述に、拘束を与  
える係助詞ならば、活用形にも、ある特質が見出せるということは、  
論理的には、矛盾しない。しかし、格助詞は違う。格助詞は、言葉と  
言葉との、関係を示すのが本義である。なのに、なぜ、連用形が表面

に浮かんでくるのだろう。あせつたあげくに、頭の中をかすめた。

もしかして、格助詞の「を」も係助詞なのか。

その後、今現在に至るまで、私は、日本語の助詞、助動詞の意味論を中心とした文法学の道を歩んできた。長い年月の間に、日本語の文法構造の中における、助詞の意味機能の全体像は、つかめたと、今は思える。

格助詞「を」の特質は、前にも述べたように、非常に単純である。

格助詞「を」がきたら、動詞が続く。

## 詩法

象徴しやうちようの付け鼻をとって

顔を洗って出なほせ

われ等らけふ今日の世界の詩人だ

無意むいと無必むひつで詩うたを作らう

韻律ゆんりつの新アメリカ発見のコロンブスであり

そして感情の紅白粉べにおしろいをけづり落せ

老いばれた詩学しがくの柩ひつぎに釘を打ち

そして新釀しんぢやうの地酒ぢざけに酔へ

われ等過去の詩の墓の上で

赤い喪服もくふくを着て踊ろう

格助詞の「を」に続く動詞は、積極的、能動的、そして果敢に挑戦する。

雪につぶやく

雪国の雪を愛さう

のがれない自然と知って

ふる雪は落花と見よう

積わたつたら綿わたと思はう

子供には砂糖とおしへ

満喫まんきつの夢を見せよう

半歳は埋れてゐよう

天上の落花の雪に

一面に地を被ひつくす

純白の砂糖の中に

度はづれの雪を愛さう

のがれない運命と知って

軒しのぐ雪に埋れて

ぬくもらぬ身をいたはらう

老いの身を 病身を

寒冷の綿につつんで

同じ格助詞「を」の目立つ詩を二篇、並べてみても、「詩法」にあった果敢な挑戦の勢いは、「雪につぶやく」には、ない。終戦を経験した日本人になれば、分る終戦時の切なさがこの詩にはある。雪を綿と思ひ、雪を砂糖と子供に教えようと歌う。格助詞「を」の本質は、行動を呼ぶ。動作を起す。言ってみれば、格助詞「を」を表現主体が使えば、

必ず動詞を続けなければならないのだし、聞手は、格助詞「を」を耳に聞いたならば、動詞がくる事を、暗黙のうちに了解している。格助詞「を」が受けた言葉が、現に、動き出すことを察知している。

格助詞の「を」を論ずれば、助詞を道しるべと思つた意味を、説明しやすいと前に述べたのは、こういう事であつた。

私は、日本語の文法構造を考える時に、叙述と陳述とを分ける必要があると思う。そして、辞であるとき枝誠記の言う、助詞も、辞そのものである陳述にかかわる係助詞と、詞の要素の強い、叙述にかかわる格助詞との間には、何らかの違いが存在するのだと予測する。違いがありながら、辞である格助詞は、格助詞の「が」「の」「を」「に」それぞれが、実に、魅力をもつて迫ってくる。何故、格助詞が辞であるのか、いかなる形で、助詞に、表現主体そのものが現われるのかを、今よりもさらに解明出来たならば、ソシユールと並ぶ、世界の二大言語観の一方を創つた、時枝学説を、さらに深く理解出来る日がくると思う。

近代詩の詩人の言葉から、日本語文法論を書く試みは、これから、少しずつ歩みを早めて、やっていきたい。今回、読み進めた、堀口大樹の詩もすばらしかった。最後に、若い時の、次の美しい詩で、この稿を閉じる。傷ついても、まだ傷の浅い、若い詩人の言葉は美しい。

夕ぐれの時はよい時

夕ぐれの時はよい時、

かぎりなくやさしいひと時。

それは季節にかかはらぬ、

冬なれば暖炉のかたはら、

夏なれば大樹たいじゆの木こかげ、

それはいつも神秘に満ち、

それはいつも人の心を誘ふ、

それは人の心が、

ときに、しばしば、

静寂を愛することを、

知ってゐるもののやうに、

小声にささやき、小声にかたる……

夕ぐれの時はよい時、

かぎりなくやさしいひと時。

若さにほふ人々の為めには、

それは愛撫に満ちたひと時、

それはやさしさに溢あふれたひと時、

それは希望でいっぱいなひと時、

また青春の夢とほく

失ひはてた人々の為めには、

それはやさしい思ひ出のひと時、

それは過ぎ去った夢の酩酊めいてい、

それは今日の心には痛いけれど、

しかも全く忘れかねた

その上かみの日のなつかしい移り香うつが。

夕ぐれの時はよい時、

かぎりなくやさしいひと時。

夕ぐれのこの憂鬱は何所どこから来るのだらうか？

だれもそれを知らぬ！

（おお！ だれが何を知ってゐるものか？）

それは夜よるとともに密度を増し、

人をより強き夢幻むげんへみちびく……

夕ぐれの時はよい時、  
かぎりなくやさしいひと時。

夕ぐれ時、

自然は人に安息をすすめるやうだ。

風は落ち、

ものの響は絶え、

人は花の呼吸をきき得るやうな気がする、

今まで風にうたれてゐた草の葉も

たちまちに静まりかへり、

小鳥は翼の間に頭をうづめる……

夕ぐれの時はいい時、

かぎりなくやさしいひと時。

#### 注

○詩は、白鳳社刊『堀口大學詩集』平田文也編によった。

○係助詞「も」及び係助詞「は」の陳述とのつながりについては、

「もとという助詞の意味」『文学』（一九六三年二月岩波書店）に論じた。

○助詞が辞であるとの、時枝説については、「日本語の美学」『日本研究—言語

と伝承—大野晋先生古稀記念論文集』（一九八九年十二月 角川書店）  
の中で論じた。



## Grammatical Descriptions of the Japanese Language-II

### —An Analysis of Particles—

Misako Kitahara

This research paper is an attempt to analyze a connective particle '*ha*' used in poems by Horiguchi Daigaku and draw some generalized rules in the usage of '*ha*'. The paper concludes that connective particles play key rôles in determining structures within which statements are delivered in the Japanese language. The paper also includes the author's analysis of a case-indicative particle '*wo*' which most effectively determines directions for flows of speech, especially in personal statements and objective descriptions. This additional study is prompted by the author's intensive study of particles and her conclusion that inquiry into this aspect of particles determining directions of speech is a key issue in any attempt at grammatical description of the Japanese language.